洋１３－３７

「命をつなぐバイオリン」　　****

２０１３（平成２５）年３月１０日鑑賞＜テアトル梅田＞

監督：マルクス・Ｏ・ローゼンミュラー
アプラーシャ・カプラン（天才バイオリニスト）／エリン・コレフ
ラリッサ・ブロツキー（才能に恵まれたピアニスト）／イーモゲン・プレル
ハンナ・ライヒ（マックスの娘）／マティルダ・アダミック
ニナ（ハンナの孫娘）／マティルダ・アダミック
マックス・ライヒ（ハンナの父、ドイツ人のピレール醸造業者）／カイ・ヴィージンガー
ヘルガ・ライヒ（ハンナの母）／カテリーナ・フレミング
イリーナ・サロモノヴァ（ユダヤ人ピアノ教師）／グドルン・ランドグレーベ
シュヴァルトウ大佐（ナチスの親衛隊）／コンスタンティン・ヴェッカー
ベッカー親衛隊少佐（シュヴァルトウ大佐の部下）／ジョン・フリートマン
ポリス・ブロツキー医師（ラリッサの父）／ギデオン・ブルクハルト
ラヒェル・ブロツキー／ナターリア・アヴェロン
サムエル・カプラン（アプラーシャの父）／マーク・ツァック
ラーラ・カプラン（アプラーシャの母）／タクマー・ザクセ
アーロン・カプラン／ミヒャエル・メンドゥル
アレクシー（醸造所の作業員）／ミヒャエル・ブランナー
タビリン大佐（ソ連の秘密警察（ＮＫＶＤ））／ロルフ・カニース
料理人／コルネリア・ザボロフスキー
２０１１年・ドイツ映画・１００分
配給／ウォーカーピクチャーズ

＜１９３９年から１９４１年までのウクライナは？＞

ヒトラー総統のリーダーシップの下に力を蓄えたナチス・ドイツが、東の隣国であるポーランドに侵攻したのは１９３９年９月１日。それは多くの人が知っているが、①その直後の９月１７日に、東からポーランドに侵攻してきたのがスターリン率いる社会主義国ソ連であったこと、②そのため、ポーランドはドイツとソ連によって東西に分断されてしまったこと、を知っている人は少ないのでは？さらに、③そんな状態下で「カティンの森虐殺事件」が起きたこと、④１９４３年４月に至り、やっと「カティンの森」に眠る数千人のポーランド人将校の死体が発見されたこと、そして③１９９０年にソ連のゴルバチョフ大統領が重い腰を上げてポーランドに謝罪するまでその責任がドイツにあるのか、ソ連にあるのかが曖昧にされてきたことは、アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（０７年）を観るまで知らなかった人が多いのでは（『シネマルーム２４』４４頁参照）？そんな前提のうえで本作の舞台となるウクライナとは？ウクライナ共和国とは？

多くの人はポーランドについてですらその程度の知識しか持っていないから、ロシア革命（十月革命）によってボリシェヴィキ政権が樹立された後、ウクライナにボリシェヴィキに反対するウクライナ人民共和国（ウクライナ国民共和国、ウクライナ民族共和国、ウクライナ共和国）とボリシェヴィキに賛成するウクライナ人民共和国（ソビエト派）が「併存」「対抗」していたことも知らないはずだ。ナチス・ドイツは１９３９年８月２３日にソ連との間で独ソ不可侵条約を締結し、これを守っていたが、１９４１年６月２２日一方的にこれを破ってソ連に侵攻したため、ここに「独ソ戦」が勃発！すると、そんな時代にウクライナの町ボルタゲワに住んでいたドイツ人は？ユダヤ人は？本作を鑑賞するについては、まずそんな歴史的事実の確認を！

＜ホロヴィッツ、リヒテル、オイストラフらを輩出！＞

子供を主人公にしてナチス・ドイツの非人間性を描いた名作は、古くは『ライフ・イズ・ビューティフル』（９７年）（『シネマルーム１』４８頁参照）、『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』（９９年）（『シネマルーム１』５０頁参照）など、近時は『ミーシャ　ホロコーストと白い狼』（０７年）（『シネマルーム２３』９６頁参照）、『縞模様のパジャマの少年』（０８年）（『シネマルーム２３』１０１頁参照）、『黄色い星の子供たち』（１０年）（『シネマルーム２７』１１８頁参照）、『アンネの追憶』（０９年）（『シネマルーム２９』１４５頁参照）等たくさんあるが、本作の主人公となるユダヤ人の子供はバイオリンの神童アプラーシャ・カプラン（エリン・コレフ）と、ピアノの神童ラリッサ・ブロツキー（イーモゲン・プレル）の２人だ。ウクライナはピアニストのウラヂミール・ホロヴィッツ、スヴャトスラフ・リヒテル、バイオリニストのダヴィッド・オイストラフら世界的に有名な音楽家を輩出した国だから、１９４１年当時のウクライナにアプラーシャやラリッサのような「神童」がいても何ら不思議ではない。

スクリーン上で見るこの２人の演奏はとにかくすごい。とりわけ、アプラーシャを演ずるエリン・コレフは現代の「神童」としてドイツで活躍している撮影当時１４歳のバイオリニストだから、本作での演奏はすべて彼自身のものだ。ユダヤ人の女性ピアノ教師イリーナ・サロモノヴァ（グドルン・ランドグレーベ）の指導の下でソ連の演奏旅行に旅立ったアプラーシャとラリッサは、スターリンや兵幹部が最前列に座る大きなコンサートホールでその神童ぶりを披露。そして今、アメリカのカーネギー・ホールに招待されるというニュースが舞い込んだため、２人はもちろんアプラーシャの両親も大喜びだ。祖父に至っては「これを機会にアメリカに永住したい」と、ちょっとヤバイ発言まで・・・。ラリッサの父親は医師だからアメリカ移住はありえないだろうが、貧乏暮らしのアプラーシャの父親も本心を言えば祖父と同じ・・・？とトラーシアアーリア人種が優れた民族でユダヤ民族は劣った民族だと信じ込んでいたが、音楽の世界でも実はユダヤ人はメチャ優秀！

＜ボリシェヴィキの支配下でドイツ人は？＞

日本は１９４５年８月１５日の敗戦以降アメリカの占領下に置かれたが、結果的にこれがラッキーだったことは歴史的に明らかだ。しかし、ウクライナの町ボルタゲワは当初ボリシェヴィキが支配していたから、ドイツがソ連への侵攻を開始するとウクライナにいたドイツ人は大変なことに。ドイツがソ連との不可侵条約を結んだことを確認してウクライナの町ボルタゲワでビールの醸造業を営んでいたマック・ライヒ（カイ・ヴィージンガー）とその妻ヘルガ・ライヒ（カテリーナ・フレミング）、そしてバイオリンを勉強していた一人娘のハンナ・ライヒ（マティルダ・アダミック）らがドイツのスパイであるとして、ソ連の秘密警察のタビリン大佐（ロルフ・カニース）から厳しく追及されたのは当然だ。

ある日のコンサートでアプラーシャとラリッサの演奏を聴いて感激したハンナは「私もイリーナ先生のレッスンを受けたい」と父親に頼み込み、マックスがそれをＯＫしたことによって、アプラーシャとラリッサにハンナを加えた３人の子供たちは深い友情で結ばれることになっていたのが、それが今のライヒ家にとっては命綱だ。アプラーシャの父サムエル・カプラン（マーク・ツァック）とラリッサの父ボリス・ブロツキー医師（ギデオン・ブルクハルト）は危険を冒してライヒ一家を森の中の猟師小屋に匿い、アプラーシャとラリッサも食料品の調達などを手伝っていたが、ドイツ軍の快進撃がボルタゲワの町まで及んでくると・・・。

＜ボリシェヴィキも嫌いだが、ファシストも嫌い・・・＞

ボルタゲワの町をシュヴァルトウ親衛隊大佐（コンスタンティン・ヴェッカー）率いるナチス・ドイツ軍が占領すると、それまで森の中に隠れていたドイツ人のライヒ一家は「復活」。そして、音楽好きのシュヴァルトウ大佐に２人の「神童」ぶりを見せつけることによって、アプラーシャとラリッサとその家族を守ろうというライヒ氏の働きかけのお陰でカプラン家とブロツキー家は生き延びることができていたが、それ為に数多くの犠牲があったのは当然。その結果、「５０歳以上のユダヤ人」である アプラーシャの祖父母たちは強制収容所へ。ナチス・ドイツによるユダヤ人の迫害が進む中ライヒ氏はカプラン家とブロツキー家の面々そしてイリーナ先生を醸造所の地下に匿っていたが、次の進撃地でビール醸造所をつくれというドイツ軍からの命令を受け、それを拒むことができなくなると・・・。

ボリシェヴィキも嫌いなら、ナチス・ドイツ一ファシストも嫌いという醸造所の作業員アレクシー（ミヒャエル・ブランナー）の協力によって、カプラン家とブロツキー家の人々は醸造所の地下から脱出したが、さて彼らの行く先は？ボルタゲワの町における複雑な力関係の変遷を丁寧に描写したこころのストーリーはよくできているが、いかんせんカプラン家とブロツキー家の人たちが一体どこを目指せば、どんな生き残りの可能性があるのかが全く見えないのが私には少し不満。現に、彼らがかつてライヒ家が潜んでいたある猟師小屋へ逃げ込んだところで、待ち受けていたナチス親衛隊に見つかってしまうと、ああやっぱりという気持に・・・。その後のナチス・ドイツによるユダヤ人に対する処置は厳しいものだったが、さて２人の神童をナチスの指導者ヒムラーの誕生祝賀会で利用しようとするシュヴァルトウ大佐の企みとは？

＜ラストの演奏は？『北京ヴァイオリン』と比べると？＞

シュヴァルトウ大佐がアプラーシャとラリッサに課したのは、生き残りをかけた完璧な演奏。つまり、客席の最前列に座るナチス将校たちの前で、２人が完璧な演奏をすれば強制収容所送りを免除するが、一つでもミスをすればその「特権」を失うというものだった。それを事前に聞かされたのがラリッサだけだったのはアプラーシャにとってラッキーだったが、りんごにナイフを突き刺し思わせぶりな目で見つめられながらそんな要求を突きつけられたラリッサの精神状態は？

陳凱歌（チェン・カイコー）監督の名作『北京ヴァイオリン』（０２年）では、コンクール前日のリハーサルで完璧な演奏を披露したバイオリンの天才少年チュンが最後の最後にコンクールよりももっと大事なものがあることに気づき、目に涙をいっぱい浮かべながら駅で弾くチャイ・コン（チャイコフスキーのバイオリン協奏曲）の響きに酔ってしまった（『シネマルーム５』２９９頁参照）が、さてラリッサのピアノ伴奏でアプラーシャが弾くブラームスのバイオリン協奏曲ニ長調、第三楽章の響きは・・・？音楽の美しさと音楽を愛する心は世界共通。しかし、それが権力によって支配され、その演奏の成否によって生死の境が隔てられることになると・・・。

このクライマックスシーンを見ていると、固想シーンから始まった本作のラストは容易に予測できる。しかし、命をつなぐことができた天才バイオリニストとドイツ人などが２人のユダヤ人の「神童」と命をかけた深い友情で結ばれた少女が、数十年後に再会するラストシーンは予測どおりであったとしても、やはり感動的。

『キネマ旬報』３月上旬号における品田雄吉氏、筒井武文氏、三浦哲哉氏の本作に対する評価は全員「星２つ」と低いが、私はそれに少し不満。三者三様の（ケチつけ）もわからないではないが、大きな歴史のうねりと時代の流れの中で「失われた命」と「命をつなぐバイオリン」に思いをはせて、素直に感動すればいいのでは・・・。

２０１３（平成２５）年３月１３日記